



東ティモール

フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅

2012年度 報告集

2012年8月4日～12日



特定非営利活動法人 パルシック

行程表

日付	曜日	時間	行程	宿泊地	宿泊場所
8月4日	土	8:50	成田空港集合	デンパサール	Mastapa Garden Hotel +62 (0361) 751660 Jl. Legian No. 139 Kuta, Bali 80361
		11:00	成田発 (GA881)		
		17:30	デンパサール着、入国手続き		
		18:30	空港⇒ホテル (タクシー移動)		
		19:30	夕食(レストラン)		
8月5日	日	7:30	朝食	ディリ	Dive Timor Guest House +670-7723-7092 Ave Da Portugal, Dili, East Timor
		8:15	ホテル⇒空港 (タクシー移動)		
		11:20	デンパサール発 (MZ8480) *機内で昼食		
		14:10	ディリ着、入国手続き後、現地スタッフと合流		
		14:30	空港⇒ホテル (車移動)		
		14:50	ホテルチェックイン		
		15:30	ディリ市内観光		
18:30	夕食(レストラン)				
8月6日	月	8:00	朝食	マウベシ	Hotel Pousada TEL) +670-7734-5321 Pousada de Maubisse, Maubisse sub-district of Ainaro District, East
		9:00	ホテル⇒パルシック事務所 (車移動)		
		9:30	パルシック事務所にてオリエンテーション		
		11:00	元受容真実和解委員会 (CAVR) 事務所見学		
		12:00	昼食(レストラン)		
		13:00	市場にて村への土産、野菜等購入		
		14:00	ディリ⇒マウベシ (車移動)		
		17:00	マウベシ郡長へご挨拶		
		18:00	ホテルチェックイン		
19:00	夕食 (Restorante Sara)				
8月7日	火	8:00	朝食	レブルリ	小学校泊
		9:00	マウベシ市場にて野菜等買い物		
		10:00	マウベシ⇒レブルリ集落(車移動)		
		12:00	レブルリ集落到着、村の方々へ挨拶		
		13:00	昼食		
		16:00	自己紹介、日本からのメッセージ旗贈呈、質疑応答、コーヒー加工方法の説明		
		18:00	夕食(自炊)		
20:00	自由時間				
8月8日	水	9:00	朝食	レブルリ	小学校泊
		10:00	コーヒー収穫手伝い		
		12:00	昼食		
		15:00	加工作業のお手伝い		
		18:00	娯楽プログラム(予定)		
		19:00	夕食(自炊)		
		20:00	村の方々とダンスパーティー		
8月9日	木	9:00	朝食	マウベシ	Hotel Pousada TEL) +670-7734-5321 Pousada de Maubisse, Maubisse sub-district of Ainaro District, East
		10:00	コーヒーの収穫・加工手伝い		
		12:00	昼食		
		14:00	村の方々とお別れ会		
		15:00	レブルリ⇒マウベシ		
		17:00	ホテルチェックイン		
		19:00	夕食(パルシックマウベシ事務所)		
8月10日	金	8:00	朝食	ディリ	Dive Timor Guest House +670-7723-7092 Ave Da Portugal, Dili, East Timor
		9:00	マウベシ⇒ディリ (車移動)		
		12:00	ホテルチェックイン		
		12:30	昼食 (レストラン)		
		15:00	現地NGO Lao Hamutuk 訪問		
		18:00	夕食(レストラン)		
8月11日	土	7:30	朝食	ディリ	休憩用ホテル
		9:00	民族抵抗博物館(見学できず)		
		10:00	アローラ財団にて土産買い物		
		11:30	コーヒー加工場(PT Nakroman) 訪問		
		12:30	空港チェックイン⇒昼食(Tmor Plaza 食堂)		
		14:50	ディリ発 (MZ8490)	デンパサール	Mastapa Garden Hotel +62 (0361) 751660 Jl. Legian No. 139 Kuta, Bali 80361
		15:40	デンパサール着		
		16:30	空港⇒ホテル (車移動)		
		17:00	自由行動(ディリ市内、ビーチ散策)、夕食		
		21:30	ホテル⇒空港 (車移動)		
22:00	空港チェックイン	機内泊			
8月12日	日	0:30	デンパサール発 (GA880)		
		08:50	成田着後、自由解散		

はじめに

パルシック 東京事務局ロバーツ圭子

2012 年は東ティモール独立 10 周年にあたり、日本国内でも関連のイベントやメディアへの露出で注目を集めていました。パルシックにとっても、コーヒー生産者の支援を始めてから 10 年という節目の年に当たります。そんな中で今年は総勢 11 名の方々にご参加頂き、8 月 4 日～8 月 12 日、10 日間のツアーを催行しました。

今回のツアーでは、新しく組合（ココマウ）に加入したばかりのレブルリ集落を訪れました。首都ディリから車で 4 時間ほどかけマウベシ郡の中心部へ行き、更に 2 時間ほど山の中を進んだところにある集落で、組合員数は約 24 世帯です。ディリを離れるにつれ道は、どんどん険しくなっていく（一部スリリングな箇所もありましたが）、山々に雲がかかる景色、伝統家屋、時々すれ違う馬に乗った農民など、ティモールの美しい風景に出会いました。この道は「カフェ・ティモール」が日本へ来る道（まさに生産者の方々が収穫した豆をトラックや馬に積んで、あるいは担いで通っている道）です。

レブルリ集落では農民たちは今回のツアーのために色々と準備をしてくれていました。中でも新しくトイレ用の小屋まで作ってくれたのには驚き、感謝でした。滞在中も、すれ違うたびに「寒いですね」「元気？」など声をかけてくれたり、あるいは笑顔を向けてくれました。

滞在中の食事は、野菜をいためたものとお米（左記がこのような集落では通常食）に加え、豚を 1 頭絞めてくれたとの事で、豚肉料理もたくさん出ました。貧しいからかもしれませんが、食材を余すところなく使う料理に、食品廃棄物が多すぎる日本に住むものとして、学ぶべきところがあると思いました。

遠い国から訪問者が来ていることは、集落を超えて近隣の村々にも届いているようで「2 時間かけて歩いてきた」という若者にも出会いました。

集落に滞在した 2 日間は、参加者の皆さんも食事支度の手伝いをしたり、現地の歌を地元の方と一緒に歌ったり、子供たちに折り紙を教えたり、サッカーボールやバレーボールで走り回ったり、言葉が中々通じなくとも様々な交流をされていて、笑い声の絶えない集落滞在になりました。

コーヒーの収穫作業では、シェードツリー（日陰樹）の下に生えたコーヒーの木々から、赤い実だけを一粒ずつ選び、摘み取ります。作業中は、農民の方々が見本を見せてくれますが、木を撓らせて高いところにある実を摘んだり、急な斜面の中、大人も子供も軽い身のこなしで働いていて、感心しっぱなしです。空気がきれいで、木々の間から太陽の陽が漏れるこの場所で、美味しいコーヒーが育っているのだ、と身をもって感じました。

その後摘んだ実を集められ、熟している実を注意深く選別し、水洗→脱肉→水洗→発酵

→水洗→乾燥と1次加工を終えます。せっかく苦労して摘んだ実が、工程ごとに、何度も選別され、どんどん減っていくのは農民の方にとって大変難しく、辛い作業だと思いました。ただ厳しく選別しないと、品質が落ち、のちにコーヒーの雑味になります。そのため農家さんは、炎天下で真剣に手選別をしていました。ちなみにここで弾かれた豆は、無駄にされず、生産者の家族の消費用になるそうです。またチェリー（完熟豆）の脱穀で出た外皮や果肉は、堆肥となり、コーヒー畑へ戻されて、循環しています。

最後に集落から首都ディリへ運ばれ、2次加工場で、脱穀とサイズ分けをされ、さらに手作業で、サイズ・品質の選別を受けます。これらは近隣に住む女性達がたくさん集まって作業をしていました。こうしてやっと日本へ向けて出荷、と一連の流れを見学しました。

滞在中には、農民や現地の NGO（LA' O HAMUTUK）のスタッフに、独立前の事、その後の経済的・政治的問題や発展についてお話をお聞きしました。ティモールには限りある資源（石油）への経済依存、インドネシアなどからの輸入超過など数多の問題があります。それをどう乗り越えていくのかと考えると、そこにはコーヒーを含めた農業の発展がかかせない事を学びました。東ティモールが抱える問題は、日本人にとってもただ押し付けるだけの問題ではない事が、歴史の側面からもわかります。一方で、子供たちが裸足でもたくましく生きている様をみて、私は強く希望を感じました。同時に本当の豊かさとは何だろう、物質的な豊さと引き換えに日本に住む私たちが失いつつあるものは何だろう、とも考えさせられました。

最後になりますがツアーにご参加くださった皆様、本当にありがとうございました。同行スタッフとして至らない点多々あったかと思いますが、色々な意見やご協力をいただいたお陰で、とても実りの多い「人と人が会う」旅になりました。この場をかりて、心よりお礼申し上げます。

何より、これからも一杯のコーヒーの背景にあるストーリーを、多くの人びとと共有できることを願っています。



東ティモールツアー、4 回目の参加で感じたことあれこれ

ほっかいどうピーストレード 荒井久代

ほっかいどうピーストレード（以下 HPT）では、2008 年 1 月から『東ティモール・マウベシ珈琲』を販売中。毎年、メンバーがこのツアーに参加し、コーヒーが高い評価を得ていることを生産者に伝えたいと考えていますが、皆さん多忙で、今年も私が参加しました。

今回のツアー参加者 11 名は、笑顔が素敵で芸達者ぞろい。生産者とすぐに打ち解け、子ども達と仲良く遊び、ダンサー人口も多かった。東京スタッフ・ロバーツさんの優しい存在感も大きかった。現地では、パルシクスタッフも生産者も超繁忙期の中で私達を歓迎してくれました。皆様のおかげでよく学び、よく遊ぶ、楽しいツアーになりました。

今回は雑感を感想にします。拙いですが、報告の方は HPT ホームページに掲載予定です。

コカマウの再出発：2011 年危機後の組合活動について心配していましたが、役員も一新して新体制で再出発していました。その役員の方から、組合加入の理由として、協力して働くことの意義と「普通の市場に出荷したら誰が買ってくれたかわからないが、組合に入れば生産者のことも知ってもらえる」という声を聞き、フェアトレード市場への期待が伝わりました。それに応えられるように、微力ながら HPT の活動を継続したいと思いました。

今年の生豆 80 トン！の予測：今年はコーヒーの大豊作。80 トン予測とも聞きました。9 月中旬でパーチメント 100 トン超え、生豆 70 トンは確定だそうです。去年は大不作で 9 トンでしたから快挙です。出荷前のパーチメントは大粒で、ピカピカの高品質でした。

元受容真実和解委員会事務所：サンタクルズ虐殺事件のコーナーなど二つの別室を初めて見学できてよかった。「みんなこの事件の生き残りです」というスタッフの方々の眼差しは、この事件を風化させてはならないという、静かではあるけれど信念に満ちたものでした。

レブルリ集落：例年温かいおもてなしを受けますが、タイスの織物、ママ、タバコ、コーヒーと、レブルリの歓迎セレモニーでは、どこかの要人のようでした。今年から組合に加入したグループで、手間隙のかかる加工作業に奮闘中。困難もあるかもしれませんが、皆さんとても仲がよさそうで、チームワークでいいコーヒーを生産してくれるでしょう。

自慢の息子：パルシク現地スタッフのネルソンさんが HOKKAIDO と書かれたキタキツネ模様の T シャツ姿で出迎えてくれました。なんてやさしいのでしょうか。そして、「生産者とともに歩むこと」が彼の一贯した姿勢であることを聞いて、とても清々しかったです。

新しい息子達：パルシクのアルバイト運転手の 3 人は、私のことを「アマー（お母さん）」と呼んで、いろいろ気遣ってくれました。伊藤淳子さん曰く「息子が 3 人増えましたね」。

カンタ！：私が、エゴ・レモスさんの「TO`OS NA`IN」を、歌い始めると集落の大合唱になりました。「カフェ・マナス・コプイダ（一杯の熱いコーヒー）」が一番大切な歌詞だとか。熱いコーヒーを飲んで働くという、まさに、コーヒー生産者の歌ではありませんか。

LA`O HAMUTUK：油田依存と円借款に警鐘を鳴らすすばらしい講義でしたが、マウベシからのカーブ路に揺られた後で記録ができず、残念。疲れていないときに聞きたかったです。

都市と地方：レブルリ集落の夜、霧が立ちこめて暗くなったとき、運転手の J さんが「本当に真っ暗で、独立したのはディリだけみたいですね」と話していました。灯りのことだけ？都市と地方の格差が広がる中で、フェアトレードが希望につながりますように。

東ティモールを再び訪れて

今井麻子

パルシックのツアーに参加するのは3度目でした。個人でも東ティモールを訪れたことがあります。パルシックのツアーでは、個人では体験の出来ないことが多く、毎回新たな発見、体験をさせていただき、とても勉強になり感謝しています。

2000年に初めて訪れ、その後独立を果たし、今年で独立10年を迎え、ひとつの国として成長していく時期に訪れ貴重な体験をすることができたことを幸運に思います。

ディリの町並みは、訪れる度に姿を変えているように感じますが、しかし、ただ発展していくのではなく、一進一退のように思えます。今回は前回の訪問より7年程空いたので、ディリの町がきれいになった、車が多くなった、大きな建物が増えた、という印象が強いです。しかし、町並みの発展と同じスピードでティモール人の暮らしが豊かになってきているようには感じ難かったです。

マウベシでは、電気が24時間供給されるようになったとのことで、夜でも町に灯りがついたというのはもちろんですが、音楽を耳にする機会が多くなり、さすがダンス好きな東ティモール人だなあと、とても印象的でした。

レブルリ集落では、コーヒーチェリーの収穫を体験させていただきましたが、過去にお世話になった2つの集落も含め、コーヒー畑や加工場の環境、水へのアクセスなどがそれぞれ異なり、こういった状況で、ある一定の品質のコーヒー豆を生産することの厳しさを感じました。

チェリーを摘む作業でも、足場が悪かったり、高所になっているものも多く、とても手間取りました。背の高くなったコーヒーの木を倒しながら摘む作業は、慣れていない私たちにとっては時間がかかり、また体力もいる作業でした。

摘む際に、熟している赤いチェリーのみを選んだつもりでも、いざ選別してみると未完熟のものが多くあり、それらははじかないといけません。

さらに果肉除去後に、果肉が取りきれないものを選別し、乾燥させたあと、また選別をする。幾度となく続く選別作業は、とても根気のいる作業で、それまでの苦労を考えると心が痛みますが、日本に輸出されるティモール・コーヒーの品質を保つこと、そしてそれがティモール・コーヒーの信頼につながり、ゆくゆくは彼ら生産者の元に戻る評価であると信じ、心を鬼にして選別作業をしました。

選別作業では水が冷たかったり、直射日光の下での作業だったり・・・「適さない物を選別する」と言葉で表現すれば簡単なことですが、実際にやってみると、コーヒー豆ひと粒でも無駄にしてはいけない、コーヒーを飲む時は一滴も残さず頂こうと思う程の、苦労がありました。

選別作業を重ねるごとに、どんどん減っていくチェリーを目の当たりにし、またディリでの二次加工においてもさらに選別を重ね、一体、摘んだチェリーのうちどれだけが、コ

ーヒーとして出荷されるのだろう、その労働量と収入のバランスを考えると気が遠くなりました。物価も思うほど低くはありませんし、ディリとマウベシとの生活の差も大きく、おそらく教育の機会も地域によって大きく異なると思います。

今回レブルリでは学校を宿泊先として提供していただきましたが、言葉の問題をはじめ、教育もこの国の中でとても興味深いテーマです。

このたった 100 万人ほどの小さな国がこれから 10 年、20 年、30 年と成長して行くとき主役となるのはレブルリで私たちを迎え入れてくれ、一緒に過ごした子どもたちです。彼らにとって、コーヒーが大きな力となることを信じ、これからも東ティモールの成長を見守り続けたいと思います。微力ながらも、日本でこの国の未来につながることをしていきたいと思います。

“Bondia ! Diak ka lae?” ～『星降る島』との“縁”～

小野 茂

「いくつかの“縁”によって『星降る島（東ティモール）』と自分がつながった」という話を聞いたのは、帰国して一週間後に参加した映画『カンタ！ティモール』の上映会場でのことでした。（映画を観るのは2回目）語ったのは小向定さん（プロデューサー・撮影・音楽監修）です。今回のタイトルに“縁”という言葉を使おうと決めたところだったので、とても偶然とは思いませんでした。自分自身の『星降る島』への旅も、まさにいくつかの“縁”のお陰で実現したと、今、強く実感しています。

ツアー参加への最終決断をしたのは締め切り直前の7月になってからでした。そもそも東ティモールへの気持ちが芽生え始めたのは5月27日、数年前に職場で知り合ったMさんに教えていただいた地元開催のフェアトレードイベントに参加したときからでした。会場で偶然見つけたパルシクのコーヒーを購入した際、近くにおいてあったツアーのチラシを何気なく手にしました。ただ、その気になったのはさらに先のことでした。ブースには映画『カンタ！ティモール』上映会のチラシもありました。（このときブースで対応してくださったのが、今回のツアー参加者のKさんだったとわかったのは、彼女とバリ島で再会したときでした。不思議な“縁”を感じます。）『カンタ！ティモール』は別の知人から、「最も観て欲しい映画」として、何度も推薦されていたため、ずっとずっと気になっていた作品でした。おそらく最初に『カンタ！ティモール』のことを教えてもらったのは2010年晩秋の頃だったと思います。

6月1日、念願叶って地元開催の上映会で映画を観ることができました。『星降る島』への想いが一気に強くなった瞬間でしたが、ツアーに参加するため仕事を休むことができるかどうかははっきりしませんでした。それでも、目に付く場所にチラシを置いたままにしてあったため、ずっと締め切りが気になっていました。問い合わせの電話だけでも…そんな気持ちで迎えた7月でした。締め切り直前の駆け込み（しかも参加するかどうかは確定していない状況）にもかかわらず、NGOパルシクのスタッフの皆さんは誠実に対応してくださいました。結局、正式に申し込んだのは7月中旬でした。

かなり前からはっきりとした目的をもってツアーに参加された方に比べると、「何となく気づいたら参加していた」という点で、やや後ろめたさ(?)があった、などという繊細な神経は持ち合わせていませんが、その分、積極的に交流したい（仕事柄、特に子ども達とは…）という想いは強く、歳とともに急激に衰えてゆく記憶力に自ら喝を入れながら、せめて最低限のテトゥン語は身につけたいと飛行機等での移動中、努力する“ふり”はしてみたものの、やはり“就眠学習”では成果らしい成果はあがらず、目覚めると眼下に蒼い海に浮かぶ美しい東ティモールが見えていました。

ふとしたきっかけ…それを“縁”というのかも知れませんが…パルシクのスタッフの

皆さん、ドライバーや現地スタッフの皆さん、ツアー参加者の皆さん、そして何より大変お世話になったレブルリ集落をはじめとする東ティモールの皆さんと繋がることができた“縁”に感謝しつつ、今はたとえ小さくても、いつかは新たな“縁”をつくる“力”になればという願いを込めて職場の皆さんにお土産に添えて次のメッセージを贈りました。

東ティモールのお土産です。どうぞ召し上がってください。職場用として、コーヒー及びサツマイモチップスは各階1袋ずつ。お持ち帰り用として、ハーブティーはお二人で1袋ずつあります。お手数をお掛けしますが、ハーブティーに関しましてはお近くの方と分け合っていただけると有り難いです。

東ティモールは21世紀最初の独立国（現在は世界で2番目に新しい国）です。興味がある方は、ぜひ位置や歴史等を調べてみてください。まだまだ日本での知名度は低いかも知れませんが、様々な点で日本とのかかわりがある国です。

今回の旅の目的は、山間部の村で地元の皆さんと寝食を共にしながら、日本などに輸出されるフェアトレードコーヒーを収穫・加工することでした。『フェアトレード』に興味がある方は今回のスタディツアーを企画・運営したNGO（[PARCIC] 特定非営利活動法人 パルシック）のホームページをぜひご覧下さい。『ハーブの薬効と楽しみ方』についてもホームページで確かめることができます。

滞在したマウベシ群レブルリ集落は、電気もガスも水道もない世帯数15ほどの小さな村（一家族は7～10人くらいが多く、集落として100人超の人口）でしたが…事前に手作りのトイレや集会（宴会？）用のテントを準備してくれたり、車でも2～3時間かかる「隣」町から発電機等を借りておいてくれたり、祭り以外ではめったに口に入ることがない豚をつぶしてふるまってくれたり、これも普段食べることが少ない白米を滞在中は毎食出してくれたり、歓迎の儀式やダンスパーティー（ダンスだけはなぜか現代風）を開いてくれたり…日本の生活と比べると明らかに「不便」な面が多いのかもしれませんが、常に心地よい時間が流れ、幸せな気持ちだけが残るかけがえのない体験になりました。

村の皆さんは温厚で、誰とも仲が良く（誰と誰が家族か最後までわからないくらい）、とにかく親切でした。たとえば、早朝誰かとすれ違えば必ず、“Bondia ! Diak ka lae?（おはよう！元気かい？）”と声がかかり、“寒くないか？（熱帯ですが高地のため朝はかなり気温が下がります。）”と火を焚いている場所に誘われ、話の輪に入りやすいよう椅子を譲られます。20人ほどの村人の中に日本人は自分一人というときも何度かありましたが、私が話す片言のテトゥン語に必死に耳を傾け、何らかの反応をしながら常に笑顔で接してくれます。片言の英語を話すことができる極一部の若者が通訳として輪に入るときは更に話が盛り上がり、話題によっては大爆笑になることも多々ありました。

子どもたちは、最初こそ緊張から(?)少し距離をとっていましたが、しばらくすると人懐っこい笑顔を見せながらテトゥン語で声をかけてきました。坂の多い集落の中を裸足(またはサンダル)で走り回り、道なき道も、木の上も、石だらけ場所も、家畜の糞の上も、森の中も、まったく平気です。5~6歳ともなれば、運動不足の日本人がついていくのは不可能なくらいの体力をもっています。ただ、5歳までの死亡率は高く、何度か話をしたお母さんも、「10人中4人の子どもを亡くした」と言っていました。普段元気そうに見える子どもたちも栄養失調の影響があり、お腹の出ている子が目立ちました。また、集落に学校はありますが、小学校を卒業する子は2割程度だそうです。

村の生活をひとことで言うならば、ここ数十年をかけて日本が手に入れてきた“もの”はまだまだ何もそろっていない場所でしたが、ここ数十年で日本が失ってしまった大切な“もの”がすべて残っている。それが滞在を通して最も強く感じたことかもしれません。

これまで50か国ほどの国と地域に行きましたが、親しみやすい国民性という点では、最上位に入ることは間違いないと思います。(「もう一度行きたい国」ならベスト3!) 買い物だけでなく、交流そのものを楽しむことができる昔ながら市場があり、海水浴ができる美しい海があり、のどかな農村が点在する東ティモールですが、経済成長率は世界ベスト5に入り、大きな変化が予想されます。事実最近になって首都には日本で見かけるそれとまったく変わらない大型ショッピングセンターがオープンしたり、高速道路の建設が計画されたりしています(後述)。今後は国際社会のかかわり方が試されると思います。PARCIC東ティモール事務所代表の淳子さん(東ティモール在住)も、「現在産出されている石油が枯渇する数年後からが本当に大変になると思います。」と話してみえました。ちなみに彼女は大学卒業直後、一般企業に就職。その後、大学院に戻り、バンダアチェでの活動を経て、独立直前の東ティモールに入り、現在に至っているとのこと。12年間という在住期間は現地の日本人で最も長く、ときには日本大使館からの問い合わせがあるそうです。今は現地の方と結婚され、生活の本拠地は東ティモールです。

余談になりますが、スタディツアーに参加する場合、必ずと言っていいほど大きな財産となるのは日本人参加メンバーやツアーリーダーとの出会いです。今回は計11名(男性4名・女性7名)。全員個人参加で、特に女性メンバーはほぼ全員が英語+第2・3言語が堪能。最も若い20歳の女子大生はベトナム・カンボジア・インドなどでバックパッカーを経験済み。東ティモール4回目のシニア女性、何カ国も巡っている50代?女性、インドネシア語を使いこなす30代女性、マレーシア在住の30代女性等、職種も経歴も様々ですが魅力的な皆さんでした。

最後に、日本と東ティモールの関係に少しだけ触れることにします。重い内容を含んでいますが、興味のある方は目を通していただけた理解が深まると思います。

1942年～45年、日本軍がティモール島に侵攻し、4万人以上が犠牲になりました。1975年、東ティモールの独立宣言に対してインドネシア軍が全面侵攻した際、安保理はインドネシア軍の即時撤退を求める決議を採択しましたが、インドネシアと関係を重視する西側の有力諸国（日本を含む）は併合容認の立場をとりました。結果、1991年、サンタクルス虐殺事件（インドネシア軍の無差別発砲により、多くの子どもや若者を含む数百名が死傷）が起き、世界中に東ティモール問題が知られることとなりました。独立を問う住民投票後も併合派民兵とインドネシア国軍による破壊・略奪行為が激化、多国籍軍派遣・国連による暫定統治・第1回支援国会議開催（東京）を経て、憲法制定議会選挙・憲法採択・大統領選挙等を実施。2002年5月20日、ようやく独立が実現しました。独立後、治安が悪化する時期もありましたが、10年目を迎えたばかりの現在は驚くほど安定していました。先日総選挙があったため国連の車両を多く見かけましたが、今後安定が続くようなら引き上げも検討されているとのこと。最近の特筆事項は、今年3月、JICAが東ティモールとの間で「国道1号線整備事業」を対象として52億7800万円を限度とする円借款貸付契約に調印したことです。本借款は、日本にとって東ティモールに対する初めての借款となるだけでなく、東ティモールにとっても海外から受け入れる初の借款となったとのこと。

難しい歴史の話ではなく、入門として、映像を通して東ティモールを知ることができる大変お薦めの音楽ドキュメンタリー映画があります。愛知県出身の広田奈津子監督による作品「Canta!Timor」（カンタ！ティモール）です。現在全国で自主上映中ですが、今月、県内でも各地で映会が予定されています。詳細は映画のホームページにあります。広田監督は現在33歳。映画撮影時は20代前半でした。最近、毎年50～100本ほどの映画を観ていますが、ここ10年間で観た作品の中で間違いなくベスト10に入る力作だと思います。（この頃20～30代女性監督の力作によく出会います。）

2012. 8. 13 小野

『フェアトレード』という言葉は、その目指す方向性を含めて、まだまだ日本では浸透している言えない状況かもしれません。しかし、フェアトレードの思想を表すことができるのは、以前から日本の文化として根づいている“縁”という言葉のなかにある、そんなことを感じた今回の旅でした。

昨年度までのツアーでも、きっと素敵な皆さんと出会うことができたと思います。それは、来年以降のツアーにも言えることでしょう。でも、今年のツアーでなければ決して繋がることができなかった、不思議な、そして何より素晴らしい“縁”を大切にしたい、今回の旅で出会ったすべての皆さん、今回の旅をつくりあげてきたすべての皆さん、今につながるすべての“縁”を一つひとつ積み上げてきた皆さんに心から感謝したい、そんな想いを抱きつつ、とりとめのない、しかもスタディツアーの感想には似つかわしくない(?)文章を締めくりたいと思います。

東ティモールツアーに参加して

神田 瑞季

私がこのスタディーツアーに参加したきっかけは、珈琲が大好きなので、珈琲の木や実を見てみたい、収穫・加工作業を体験してみたいという気持ちからでした。しかし東ティモールについては、国名は耳にしたことがあるだけの全く無知の状態、また友人や家族も「東ティモールって戦争をやっているのでしょうか？ 危険なところでしょうか？」という反応ばかりだったので東ティモール=危険というイメージがありました。さらに事前説明会で観た映画「Balibo」の内容は衝撃的で、ますます東ティモールへ行くのが不安になる一方でした。

しかし実際に東ティモールの首都ディリについてみるとつい最近まで惨劇が起こっていた国とは思えないほどとても平和な国でした。また街のインフラも整っていて、想像していたよりも発展した国なのだなと感じました。一方でレブルリでは電気も上下水道もなく、そのディリとの生活格差に驚き、やはりまだまだ発展途上であることを実感しました。

レブルリでの歓迎の儀式では、ビンロウの実と石灰を巻いた噛みタバコにチャレンジしましたが、美味しくないと口の中は痺れるので、なぜ東ティモールではこれが好まれているのか理解できませんでした。ご飯はとても美味しかったのですが 2 日目にはお腹を壊してしまい、帰国後まで正露丸のお世話になってしまいました。

ダンスパーティーでは、ノリの良い音楽とは相反してしっとりとしたダンスでしたが、意外とステップが難しく村の子に何度も教えてもらいながらなんとかついていくことができました。やっとステップが分かってきたころにはだいぶ疲れていたのが早々に寝床に引き上げましたが、連日朝まで踊り早朝には起きてきている村人のパワーには驚きました。

珈琲収穫・加工作業の体験はずっと楽しみにしていたので、珈琲の実を初めて見た瞬間や果肉の味には感動しました。加工作業も決して楽な仕事ではありませんでしたが、とても楽しく作業ができました。また収穫から最終加工までの一連の作業を見て、品質管理もしっかりとされており、自分が毎日おいしく飲んでいる珈琲はこれだけの手間ひまかけて作られているのだと実感することができました。

私は今回のツアーを通じて東ティモールの良いところをたくさん感じる事ができましたが、一方で東ティモールでは珈琲生産だけでなく政治、経済、教育分野などで今後の発展のためにはまだまだ課題がたくさんあることも学びました。微力ですが、今の私にできることとして東ティモールの良さ、レブルリの村人の心の温かさ、ティモール珈琲の美味しさを周囲にも広めていき、より多くの人に東ティモールについて興味を持ってもらえたらと思います。

最後になりましたが、今回のツアーの計画・運営をしてくださったパルシクの皆さん、私たちを受け入れてくださったレブルリの皆さん、そして参加者の皆さん、本当に楽しく充実した9日間でした。ありがとうございました。

「いつか機会があったら行きたいな。でも、観光地でもない小さな国に行く機会なんてないかもしれない。」と心の片隅に引っかかっていた東ティモール。その東ティモールに「行こう！」と思い立ったきっかけは、5月に見た映画『カンタ！ティモール』でした。映画で得た知識しか持たないまま勢いで参加を決めたスタディーツアーだったので、リピーターの方やコーヒーやフェアトレードに興味のある方々に混じって旅をすることの不安も抱えながらの出発でした。

まずはバリ島のデンパサールへ、そして翌日は東ティモールの首都ディリへ。ディリは空港こそ小さいものの、通りには車がたくさん走り、真新しいショッピングモールや綺麗な建物も目につきました。想像していた以上に発展した都会という印象でしたが、目の前の海や山は本当に美しく、浜辺では裸の子供たちが遊ぶ姿も見られます。海に沈む夕日を眺めていると、すでに日本とは違うゆったりとした時間の流れを感じました。

ディリでは、サンタクルス墓地や受容真実和解委員会事務所などを見学しました。この暖かく平和な島の人々が、ほんの少し前まで悲しく痛ましい歴史を歩んできたのかと思うと、胸が締め付けられる思いでした。独立運動に参加していたという、私とそう変わらないであろう年齢の男性の話が、とても印象的でした。

ディリからは、車で山道を3時間ほどかけて標高約1500mのマウベシを目指します。山道では、車よりも馬とすれ違う方が多くなり、車窓からは牛やヤギも見えました。

標高の高いマウベシの夜は、南の島とは思えない寒さです。しかし、今までに見たどんな夜空よりも美しい星空を眺めることが出来、素晴らしい思い出の一つとなりました。マウベシでは少し前に電気が24時間通るようになったとのことでしたが、宿泊したホテルではブレーカーが何度も落ち、ほとんど停電のような夜を過ごしました。帰国した今では、それも楽しい思い出の一つです。

マウベシに一泊した後は、さらに車で2時間ほどのレブルリへ向かいます。電気も水道もないレブルリでは、村の人々が手作りのトイレや大きなブルーシートを張った食堂兼集会所を準備して、私達を受け入れてくれました。食堂は発電機により夜でも明るく、ここで朝まで続くダンスパーティーも催されました。

私達は、職員室と教室一つの小さな学校に寝袋を敷いて2泊3日で泊まりこみ、コーヒー収穫のお手伝いを中心に村の人々と交流させていただきました。私は到着した夜に体調を崩してしまい、村の女性達が作ってくれたお料理を思う存分楽しめなかったり、ダンスパーティーを早い時間で切り上げざるをえなかったりと、少し残念ではありましたが、それでも収穫や選別のお手伝いが出来たこと、子供たちと風船や縄跳びで遊んだり、テトゥン語と日本語と拙い英語とでお互いの言葉を教え合ったりしたことは、とても貴重な経験となりました。

日本で生活していると、日本の基準で豊かさや貧しさを測りがちです。しかし、元気に

遊び、お手伝いし、目をキラキラさせて言葉の一つ一つを学ぼうとするレブルリの子供たちから、数字では表わせない豊かさを教えてもらったように思います。日本では見失いがちな心の豊かさに、改めて目を向けた瞬間でした。

収穫期でお忙しいにも関わらず、村の人々は、歓迎の儀式から始まり、甘いコーヒーと美味しい食事（私達のためにブタを1頭しめてくれました！）で私達をもてなしてくれました。言葉が通じなくても、少しはにかんだ笑顔で私達との出会いを喜んでくれてるのが伝わります。斜面を下りたり登ったりしながらのコーヒーチェリーの収穫や、手間のかかる選別作業のお手伝いをさせていただいたことで、今まで何気なく飲んでいた1杯のコーヒーに、なんと愛着を感じるようになったことか…。たった3日間のレブルリ滞在でしたが、目には見えないかけがえのないプレゼントをたくさんいただきました。とても感謝しています。

レブルリを離れ、再びマウベシ、そしてディリへ。再び訪れたディリではレブルリとの落差に愕然としながらも、今後この国がどのような形で発展していくにせよ人々が心の豊かさを失うことのないように、また帰国後には私もティモールの人々を見習って心豊かに優しい気持ちで生きて行こうと、そんなことを思いました。

気が付けば、旅の最初感じていた不安はいつの間にかすっかり消え、東ティモールの皆さんからもツアー参加者の皆さんからも、たくさんの感動をいただき、本当に幸せで有意義な時間を心から楽しんでいました。

アテンドして下さったロバーツさん、現地での案内をして下さった伊藤さん、大坂さん、大変お世話になりました。きめ細やかなお心遣い、本当に感謝しています。パルシックの現地スタッフの皆さんや旅をともにした3人のドライバーさん、レブルリの皆さん、そしてツアー参加者の皆さん、楽しい時間を本当にありがとうございました。皆さんと出会えたことは、素晴らしい宝物となりました。

きっと、いつかまた、東ティモールに行こうと思っています。



レブルリの子供たち

このツアーには、いろんな偶然が重なって参加することを決めた。

でも申し込みを済ませた後、実のところ、期待よりも不安の方が大きかった。私の中の東ティモールは、独立よりはるか昔で時間が止まっていたし、これまで海外旅行はそれなりにしてきたけれど、現在進行形で貧困に苦しむ国は初めてだし、電気や水道のないところで数日過ごし、その上シュラフで寝るなんて子供のころのキャンプ以来のことだし、人一倍蚊に刺されやすい体質故、マラリアへの恐怖は並々ならぬものがあった。何よりもツアーという形態で旅をすることは、自由気ままな一人旅に慣れてしまった私にとって、一番の不安材料だった。

大人になってこんなに不安になったことはないくらいのレベルだった。

このツアーで訪れた東ティモールは、そんな不安はまったく不要で、たくさんの楽しい思い出と、千枚は軽く超える多くの写真と、多少の虫刺され跡とともに、8月12日、東ティモールの虜になって帰ってきた。

東ティモールに行ってみて思ったこと。

本当に貧しい国だけれど、人々は純粹で、目がきらきらしていて、活気があふれていた。子供たちが無垢で、本当に可愛かった。希望を見た気がした。

村でのおもてなしは、文字通り「心づくし」で、村の女性たちが用意してくれた食事は本当に美味しかったし、電気や水道といったインフラがないことを不便とは感じなかった。

排気ガスも少ないから空気もきれいで、コンタクトレンズをしても目が痛くならなかった。

電気がないから、星がよく見えた。流れ星も、天の川もくっきり見えた。

空は抜けるように青く、澄んだ海はエメラルドグリーンをたたえ、緑が映える美しい山々、そして真っ赤に熟れたコーヒーチェリー。自然の醸す色がビビッドでまぶしく、生命感に溢れていた。

東ティモールで過ごして学んだこと。

貧しいことと治安が悪いことは、必ずしもイコールではない。他の国だったら間違いなく危ないと言われる市場を歩いていると、危険を感じずに散策できた。

暮らしを営むのに必要なモノというのは、実際は非常に少ない。私たちの暮らす日本は、モノが多すぎる上に、使い捨ても多い。帰国した当日、モノの多さに圧倒されたし、使い捨てを助長するようなトレンドの移り変わりの激しさに憤りさえ覚えた。

日本と東ティモールとは経済格差こそあるけれど、資源をもたない島国で、基本的に輸入に依存した体質であり、大きな負債を抱えているという点で、おかれている状況は似通っていると感じた。違うのは国民性と民間企業の体力くらいだろうか。帰国してから東ティモールの写真を見せながら話をしていたら、50年前の日本みたいと母が言っていた。東ティモールにも日本のよ

うに大きく発展するチャンスはあるのだと実感した。それが彼らにとって望ましいことかどうかは、また別だけれど。

東ティモールに足りないもの。

それはお金でも天然資源でもない。（足りてはいないけど）

環境への関心。

お菓子の包み紙が散乱する広場を見て、そう思った。先進国が歩んできた失敗の轍を、彼らは踏む必要はないし、踏んでほしくない。東ティモールの海や山で育まれた豊かな自然を、守り育ててほしい。そのためには、先進国の指導や支援が欠かせないだろう。広場でごみを拾い集めていたら、子供たちもまねして拾い始めた。理由はよくわかっていなかったかもしれないが、こういった姿勢を示すことで、意識に変化が生まれるかもしれない。

あえてもうひとつ挙げるならば、効率。

訪ねた村でコーヒー豆の収穫から加工、出荷までの一連の作業を体験したが、とにかく効率が悪い。人手ばかりかかり、無駄もかなり多い。よくいえばスローライフともいえる効率の悪さは、東ティモールのいいところであるのだけれど、グローバル化が進んでしまった今、国際市場に打って出ようとするならば、効率の改善は無視できない課題だろう。

すべてひっくり返して、愛すべき国、愛さずにはいられない国、東ティモール。

このツアーに参加してよかった。

このツアーに巡り会えてよかった。（文ちゃんありがとう）

このツアーの参加者のみんなに、PARCICのスタッフのみなさんに、このツアーで出会えてよかった。

ただ、東ティモールを知らない人に、この国のよさを理解させるのは非常に難しい。

興味をもったら、是非自分の足で行って、見て、触れて、感じてきてほしい。

私の会社は、コーヒー焙煎業者です。業務用から家庭用コーヒーまで 50 種類程のコーヒーを扱っております。三年前に JONA で有機 JAS 認定工場の資格を取得してオーガニックコーヒーの販売に力をいれており、三年前にパルシックさんを通して東ティモールの有機コーヒーを扱うようになりました。その品質の高さ、安定した味は驚くばかりです。

今回、パルシックさんから「フェアトレードコーヒー生産者を訪れる旅」の話を頂き、東ティモールの風味豊かなコーヒーを育てる自然環境や生産に携わる農民の生活、又厳しい基準をクリアする生産工程等「コーヒー屋」としての視点で見学・体験したく参加を決意しました。

首都ディリからパルシックの拠点のあるマウベシ郡へ。そのマウベシ郡から車で険しい山道をいくつも登り降りし、約 2 時間かけて目的地レブルリ集落に到着。標高 1200m の高地。おいしいコーヒー豆の条件である激しい寒暖の差をまず実感する。

翌日、コーヒー農園へ。

コーヒーの木は山地の急斜面にシェードツリー（日陰樹）に守られるように散在していた。

木はかなり高く（3～4m）、高い位置にある枝は、低く引き寄せてチェリーを摘み取る。

急斜面なのでコーヒーの収穫は、必然的に機械を使わず、一粒ずつ手摘みで、真っ赤に熟した完熟豆だけを摘み取る。足場が悪いので、かなりの重労働である。

中南米の整備された農園のように、剪定して木を低くすれば良いのだろうが、その間の収穫量の減少を考えると、なかなか踏み切れないそうです。

また、この様な山岳地帯ではシェイドツリー等の落ち葉が肥料となり、またコーヒーの種を取り出した果肉部分を堆肥として利用しているそうです。まさしく化学肥料を全く使わない有機コーヒーである。

午後、コーヒーの精製行程を見学。



(1) 水槽に入れ、浮いた欠陥豆を除去



(2) 果肉と種を分離



(3) 水の中で 24 時間発酵させ、ぬめりを除去



(4) 2 週間ほど天日で乾燥



(5) 乾燥させたパーチメント付きコーヒー豆を選別

すべての行程で、不純物・未成熟豆・虫食い豆等を丁寧に除去選別します。

この様にして、おいしいコーヒーができるには、栽培から収穫・出荷までたくさんの丁寧な手作業が行われています。

「おいしいコーヒー」には全てそれなりの理由があるのです。

【おわりに】

コーヒー屋の立場としてコーヒーそのものの生産体験を述べましたが、植民地時代・インドネシアの武力侵攻と悲劇を味わってきた東ティモール。コーヒー生産の歴史は古いとはいえ、独立後の短い期間にこれほどの高品質のコーヒーを生産している事は驚くばかりです。

電気・ガス・水道のないレブルリ集落。この様な村人が手作業で高品質のコーヒーを生産できるのは、栽培から収穫・出荷までパルシクの皆様のご指導・コーヒー生産組合（ココマウ）の設立・フェアトレード等の活動によるものと思えます。



宮本 尚宏

この旅で得たものが沢山ありました。特に人と人との出会いと繋がり的重要性を身に染みて感じました。また、ここ最近荒んだ生活だったこともあり、東ティモールの壮大な自然と子供達の満開の笑顔にかなり癒され、そして心から笑うのは本当に久しぶりでした。帰国してからもティモール時間が中々抜けず、暫く仕事が手につかない日々が続きました。

移動や慣れない事が多々あり大変でしたが、コーヒー生産者の方々と直に接することができ、どのような気持ちでコーヒーの収穫を行っているか、実際にコーヒー収穫・加工・選別を体験した上で自分なりに深く考えることができました。自分が毎日何気なく飲んでいるコーヒーが出来上がるまで、こんなにも大変な工程がいくつもあるということを知り、今や一杯のコーヒーを飲むと、赤いコーヒーの実を摘んだこと、村でのみんなとの思い出、特に「JAPAN」と書かれた青いサッカーボールの行方など、色々と蘇ります。



特に印象的だったのが、市場や村の子供達でした。働いている子、遊んでいる子、みんな一生懸命でした。一緒に遊んでいると、言葉が通じなくても、笑顔や笑い声を通して会話をしている気になります。特にサッカーは本気で、高地でしかも休憩なくボールを追いかけてまわすので、運動不足の私にはハードすぎました。最初は中々近寄ってくれませんでした。徐々に慣れてきたのか一緒にボールを蹴ったり、鬼ごっこをしたり、笑ったり騒いだりすることは本当に楽しかったです。ただ、見た目が怖かったせいかわかりませんが、どの子にも最後まで懐かれませんでした。

東ティモールについて、最初は漠然としたイメージでした。東ティモールが抱える問題と悲惨な歴史について、実際に現地を訪れ、直接見て聞く内容は、事前にwebや書籍で調べていた情報よりも、非常に大きな重みを感じました。現地 NGO(La'o Hamutuk)を訪問する機会があり、そこで活動内容や今後の国造りの在り方について、わかりやすくプレゼンをしていただきました。そこで石油依存や首都 Dili への人口集中、貧富の格差などの現状みえている問題について学びました。国の政策についてどうある

べきかを考えた時に、最初はあまり考えがありませんでした。しかし、プレゼン後、自分が直接見て聞いた内容と、今のこの国の現実を踏まえ、国の政策や将来について、本当に必要なものは何だろう？環境問題や当面の人口集中問題については？など、そんなことを素人ながら色々と思いつけました。裕福な日本で育った私が、たった数日、他国に行って、ここまでこの国のことを思うのも何故か、帰国してからもコーヒーを飲みながらふっと考えてしまいます。今後も自分にできる限りで東ティモールに関わって行きたいと勝手に思っており、これは、直接行った人でしか味わえないティモールマジックなのでしょうか？(笑)

今後も紆余曲折があると思いますが、5年後そして10年、20年後、海外支援と急成長の行く末に、孤児が増えたりゴミで街が溢れたりすることなく、全ての子供達が希望に満ち、綺麗で、活気ある素晴らしい、そして日本よりも魅力溢れる国となることを祈っております。



最後に、非常に有意義な旅となったことを心より感謝申し上げます。カンダ・ティモールのみんな、現地の方々、そしてパルシックのスタッフの皆さん、本当に有難う御座いました。

今回のツアーで初めて東ティモールに行きました。感想は、独立当初から行ってみたいと思いつきながら機会を逃してきた東ティモールについて行くことができ「本当によかった！」ということに尽きます。あとは、途中でダウンして迷惑をかけたり、行程の一部を諦めたりといったことがないように、というのが（情けないことに）最大の目標だったので、それが達成できてホッとした、ということでしょうか。（情けな〜い）ただ、そのために、交流の時間は常に省エネモードになり、特に、生産者のみなさんが楽しみにしていたというダンスパーティにほとんどいなかったことは、生産者のみなさんと、今回のツアーのために大きな労力を割いて準備し、受け入れてくれたマウベシのスタッフに申し訳なかったと思っています。

フェアトレードについてのスタディツアーであるにもかかわらず、今回強く印象に残ったことは、（生産地・レブルリ集落で見た” コーヒーの有機農業” が、自分の” 農業” のイメージから全く外れていてびっくりした、ということではありますが）コーヒー以外のことでした。一つは、生産地・レブルリ集落での滞在のあと、マウベシに戻り、事務所で夕食をとった夜、小高いところにある事務所のテラスから見下ろした街の夜景です。ポツリポツリと電気がついていて、時間が経つにつれてその数が減っていくのを見て、「ああ、ここには、必要な分だけの電気を使って暮らしている人たちがいるんだ！」と思いました。石油や美しい海といった、産業、観光の資源に恵まれている国の人たちが、（多分、もっと使えたらもっと楽な暮らし方ができるのに、と思いつきながら）余計な電気を使わずに暮らしている（どころか、レブルリには電気も水道もないし、ラジオの電波も届かない！）のに、日本では、資源がない資源がない、と言いつきながら、世界中から資源を買いまくって、無駄に消費したり、なくても構わないもの、次々に買い換えていってもらわないと困るようなものを大量に生産して、世界中に売りつけたり、スカイツリーのような、なぜ必要なのか私にはさっぱりわからないようなものが次々と作られている、原発事故で世界に汚染をばらまいてその始末もつけられないのに、そういう経済のあり方を続けようとしている一私には、狂っているとしか言いようがありません。マウベシの夜景を見て、私は、なんて健全な暮らし方なんだ！と感動したのですが、私が狂っていると思う日本のあり方を当然のもの、良いものと考えている人たちは、同じ景色を見て、なんて貧しい！としか思わないのでしょうか。

もう一つは、時間的に逆になりますが、レブルリ集落で、滞在最後のお別れ会の時に、代表の方が言った言葉です。「機会があったらまた来てください。来られなくても、私たちはここで元気にやっています。」こちらがまた行かない限り、再会することはないのだ、ということのを淡々と、しかしはっきりと言いつ渡されてしまいました。確かにレブルリはとても遠かったです。移動の都度宿泊して、先へ進むのは日を改めて、という日程だったので、レブルリに着くまで何日もかかりました。今回、移動の多い日程が少々きつく感じたので、

このようなツアーに今後また参加しようと思うかどうかわかりません。参加したとしても、訪問するのはおそらく別の集落でしょう。レブルリでの初日に、「組合に入ることで、暮らしがよくなることを希望している」と言っていました。一人ひとりが具体的にどのようなことを思い描いているのかはわかりませんが、みなさんの希望が実現することを願っています。

今回は、働いている人たちが休みを取りやすい時期、コーヒー収穫作業が最盛期を迎えている時期、に実施しようということで、初めて、日本のお盆の時期に設定されたそうです。日本では一番暑い時期、それだけでなくもすでに夏バテでへたっている時に熱帯の国へ行って、電気も水道もない集落に泊まって農作業をする、などというツアーは、自分にはとても無理、と思う体力のない人、年齢の高い人などがいると思います。しかし！実は、この時期、東ティモールは東京よりずっと過ごしやすいです。コーヒーの収穫期は乾季に当たるので、気温の高い首都ディリでも、湿度は低く、日陰に入ればかなり快適です。汗もほとんどかきません。生産地マウベシ郡は高地、きっと他の人の感想文に書いてあると思いますが、夜はスリーシーズン用寝袋では寒くて耐えられないほどの気候。（私は、暑い思いをするかなと思いながらも、それしか持っていないので、真冬用の寝袋を持って行き、快適に熟睡しました。）マウベシ郡内は、昼間の数時間以外全く冬の気候なので、日本とは季節が反対になったような、南半球に来た実感が楽しめます。なので、心配している方には、心配ご無用！ぜひ行きましょう！と申し上げたいです。

事前準備の段階で、不安に思うことが二点ありました。

一点目は治安です。2012年、東ティモールは選挙の年でした。4月に大統領選が、7月に国民議会選挙がおこなわれました。ツアーは8月です。国民議会選挙の結果を受けて情勢がどう変化するか、毎週スタッフミーティングで情報共有をし、自分たちなりに「大丈夫」という分析をしました。が、頭の中には何度も2007年のツアー最終日の情景が浮かんでいました。やはり選挙年だったこの年、たくさんの楽しい思い出とともにマウベシからディリに戻ってくると、税務署が燃やされており、空港までの道のりは護衛の国連車両の後ろを猛スピードで追いかけていったのでした。

二点目は訪問集落です。マウベシのコーヒー生産者組合「コカマウ」には14集落が加入しています。どの集落もこのツアーの受入れを楽しみにしてくれているので、毎年、訪問先は順番にお鉢が回るように気を配ります。今年、対象にできる集落は複数ありましたが、最終的に選んだのは車両での進入が可能なレブルリ集落でした。レブルリは2012年新規加入集落で、実は、コーヒー加工での品質管理にまだ課題の多い集落でした。また、集落によってカラーがあり、人とくに外国人をもてなすことに長けた集落とそうでない集落がありますが、レブルリはどうみても後者でした。

ツアーを終えて、これら不安が杞憂に終わったことにほっとすると同時に、滞在12年目のわたしにとっても新しい発見がありました。

ポスト受容真実和解委員会（CAVR）事務局の一角に潜む、2つの小さな部屋。そこには、東ティモールの人びとの日常からはすでに遠のいてしまった歴史の一片が、その当時を振り切ることでできないたくさんの人たちの熱意とともに、ひっそりと展示されていました。レブルリグループ代表マテウスさんのホスピタリティ。普段はコーヒーの乾燥場になっている自宅の前庭にビニールシートでテントを張り、竹を切り出して土に穴を掘って自宅のピンク色のカーテンを持ち出してトイレを作り、台所をグループの女性たちに開放してディリから休暇で遊びに来ている親戚の若い女の子たちも動員して一日3食を用意し、朝食にはパンにつけるマーガリンとコーヒーに入れるコンデンスミルクも調達し（これらは彼らの日頃の食卓には滅多に上がらない）——もてなしの段取りがわからなくて耳打ちをしてくるマテウスさんの、やさしいもてなしの気持ちが伝わってきました。グループ運営やコーヒーの品質管理について厳しいことばかりいっているときには見えてこなかった一面でした。

2006年からパルシクのコーヒー事業の中心として実績を積んできたスタッフ、ネルソンにとっての「やりがい」。ツアーの受入れ準備を主に受け入れ集落との間で調整してきたネルソンが、ツアー中は大量のコーヒー集荷作業のために参加者と交流できず、なんとかその機会をと、マウベシ最後の夜、寒空の下パルシク事務所のベランダで交流会を設けました。なぜこの仕事をしているのか、という質問に、わたしが通訳では答え難かろうと思いつつ、彼が言ったのは「コーヒー農民のために働けることはやりがい」。そんな風に思

うようになっていたのだなあと、背の高いネルソンが一段と大きく頼もしく見えました。

わたしたちは毎年、コーヒー生産者と日本の消費者のみなさんが互いに顔を合わせ、コーヒーを通じて互いを知ることがを願ってこのツアーを企画、実施してきました。そのめぐりあいの現場に立ち合わせていただくことは、わたしたちにとってこそ大きな励みになっている、ということを思いました。ありがとうございました。

大坂智美

今回はお客さまを受け入れする 2 度目の経験となったツアーでした。前回同様、どのようなお客さまがいらっしゃるか出会いが楽しみなのが 5 割、安全無事に遂行されるかどうかの不安が 5 割。空港にご到着された際、はじめは皆さんお疲れと緊張で、表情が若干強張っていらっしゃいましたが、すぐに打ち解け、ご帰国のタラップを上られ機内に入る直前のその時まで、私のほうこそ楽しい時間を共に過ごさせて頂くことが出来ました。

この度の行程で個人的に印象に残っているのが、受容真実和解委員会の施設を訪問した際に、1991 年 11 月 12 日サンタクルス虐殺事件に遭遇した人々の委員会事務所に初めてお邪魔できたこと。生々しい写真の数々と犠牲者が当時着ていた T シャツ。恐ろしい体験を少しだけ近く、しかし今までもより感じる事が出来ました。

マウベシでは、コーヒー大豊作とグループ拡大に伴う業務に追われてしまい、ルムルリ集落で皆さんと共に過ごす時間がとても短くなってしまいました。しかしマウベシ事務所では、皆さんとお食事、ベランダで歌とダンス、大変楽しかった、しかしとっても寒かったですね。事務所へ皆さまをお連れせず、寒空の中長いあいだ冷たいコンクリートの上に座らせてしまう気の利かなさ、あとで反省したのでした...

皆さんのご帰国後、今回お願いしたドライバーのアジェ、ティソンに会う機会がありました。アジェはドライバーの仕事でマウベシに来た際、自身のお客さまを連れて遊びに来てくれたのです。またティソンには「みんなのフェイスブックアカウント知っている？」と聞かれ...。彼らにもとても楽しい思い出となったようです。

東ティモールを大好きになるきっかけの一因を少しでも担うことが出来たのであれば、私としては東ティモール・フリーク冥利に尽きます。これからもどうか、東ティモールをご愛顧頂きますよう、お願いいたします（笑）。そして、また皆さんとここ東ティモールで再会できれば、カパース（テトゥン語で『最高！』）です。

特定非営利活動法人 パルシック

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町 1-7-11 東洋ビル

TEL:03-3253-8990 FAX:03-5209-3453

E-mail:office@parcic.org WEB: www.parcic.org